く白い幟旗に多くの人の日体大への思いを感じ取りました。就職対策セミナーでは自分の未来を真摯に啓こうとする多くの学生に出会うことができました。保護者会の活動として取り組んできたことではありましたが、それを終えた後には、いつも何か心の中に温かいものが残りました。

在学生の保護者から同窓生の保護者となりましても、今後も応援し続けたいと思っております。

日本体育大学の新たな使命

日本体育大学学長
具志堅幸司（昭54卒）

本学は平成三十年四月に、スポーツマネジメント学部、大学院保健医療学研究科および体育科学研究科コーチング学専攻を新たに開設し、五学部九学科、三研究科四専攻の教育研究体制がスタートします。

これにあわせ、昨年四月の学長就任後、二〇二〇オリンピック・パラリンピック東京大会後を見据え、改めて「建学の精神」の具現化（体育・身体活動・スポーツを通じた健康で豊かな社会・人づくりの実現）に向け、本学の果たすべき役割を次の通り、見直すことと致しました。

①真理の探究

人間の「活力ある身体」について、当該関連領域の先駆的・実践的研究の積極的な推進を図る。

②活力に満ちた社会の創生を担う人材の輩出

国際社会・地域社会におけるリーダーとして、その素養を十分に備え、幸福で豊かな社会の　構築に資する有為な人材を育成する。

③国際平和の実現

オリンピック・パラリンピックムーブメントを実践・普及するために、スポーツのもつ「力」を有為に活用し、世界のスポーツ文化の深化・発展に努める。

④体育・身体活動・スポーツの価値を理解した高い競技力を有する学生アスリートの育成

高い競技力を有し、かつ、他者の憧れ（「生き方モデル」）となる学生アスリートを育成するとともに、その活躍を通じ、人間の生命の輝きや身体の躍動について追究する。

こうした新たなミッション（社会的使命）のもと、わたしたちは、体育スポーツ学、教育学、保健医療学分野で世界をリードする大学を目指して、その教育と研究、社会貢献、さらには競技力向上のための様々な取り組みを積極的に展開してまいりたいと思います。本学の伝統、強みを継承しつつ、新たなチャレンジに臨みます。これからの母校の進展に、どうぞご期待ください。

日本中学校体育連盟研究大会 北海道大会を終えて

沼津市立金岡中学校
渡邉竜史（平11卒）

今回、中体連研究大会での発表者という大役を任されることになり、静岡県の代表として役目を果たせるかという不安と同時に、現在の部活動の置かれている状況について深く考えを巡らせたことのないことに気付きました。

教員という仕事に就いて十年が経ち、保健体育の授業や部活動を中心に自分のできることを精一杯やってきました。目の前にいる生徒に自分の持っている技術や知識を伝えようと試行錯誤を繰り返しながら、様々な手法で生徒と向き合ってきました。

当然、うまくいくことばかりではありませんが、生徒の成長していく姿を見るとやりがいを強く感じることができ、生徒と一緒に喜べるうれしさや楽しさも実感することができました。

昨年度から、沼津市の中体連理事長の役に就き、市内中体連大会の運営管理や静岡県中体連との連絡などの仕事を行うようになりました。目の前にいる生徒だけを見ていたところから、沼津市全体のことや静岡県中体連との関連を考える立場となり、そんなときに研究大会の発表者の打診もありました。

現在、中体連（運動部活動）では多くの課題を抱えています。少子化による部員数の減少やそれに伴う各中学校の部活動数の減少、指導者である教職員の多忙化など、有効な解決策がない状態で現場は苦しい運営を迫られています。生徒の立場から見ても、集団競技でチームを組めなかったり、希望する部活動が設置されていなかったりと、部活動を取り巻く環境は私たちが生徒として汗を流して頑張っていた時代とは大きく変わってきています。

しかし、現場で指導していると、生徒の気持ちはいつの時代も変わらないように感じます。「もっと技術を身に付けてうまくなりたい。記録を伸ばしたい」、「仲間と協力して試合を楽しみたい。勝ってチームで喜び合いたい。」など、不変的なものが部活動にはあると思います。

研究大会を終えて、各都道府県中体連で同様の問題を抱えていることを再認識しました。新聞・ニュース等では、『部活動ガイドライン』に関する話題が取り上げられてきています。部活動を取り巻く環境が変化する中で、私達がすべきことは、今の子どもたちがスポーツを行うためのよりよい環境作りと、なによりスポーツを楽しむことのできる現場での指導だということを改めて感じました。